
とある学園の徒然草

木林 止

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園の徒然草

【Nコード】

N4171Y

【作者名】

木林 止

【あらすじ】

なぜ、こんなことになってしまったのか。

しかし、現実には彼等の困惑などお構いなしに進んでいく。

一枚の紙が決定付ける運命とは？

そして、そこから？伝説？は始まるのだった……

「いや、タダのboroboroな学園コメディ（予定）だし」

く生徒手帳vol.1く（前書き）

とりあえず、主要メンバーの簡単なプロフィールです。
話を思いついた時点で追加がかかると思われます。

〈生徒手帳 Vol.1〉

基本的には、作中に出てくるクロスベル市そのものが舞台です。とりあえず、作者のオリジナル設定を書いています。

市立クロスベル学園

クロスベル市の港湾区の小高い丘（原作のIBCがある場所）に敷地がある巨大な学園施設。

初等部、中等部、高等部、大学過程があり、それぞれ、6年制、3年制、3年制、4年制のカリキュラムが組まれている。

登場人物

ロイド・バニングス（16）

クロスベル市西通りベルハイム202号室にガイと二人暮らしの高等部2年生の主人公。

兄の仕事の関係で、中等部の3年間はカルバード共和国の学校に在学。昨年、市立学園に編入。

頭脳明晰、運動神経抜群、甘い優顔と、三拍子揃ったオールラウンダーで人間攻略王。

そして、美人な幼馴染がいるという時点で、幼少時にしてすでに人生勝ち組な男。ああ殺したい

だが、身近にガイという超人がいる為、常に劣等感を持ち、自分の事を『特徴なしの一般人』と思っている。だから、自分がモテるなどと全く思っていない。

結果、自分に対して向けられる恋愛感情に対して、絶望的なまでに鈍感。死ねばいいのに

学園内に、すごい規模のファンクラブ（会員は年上の方が多い）が存在するが、やっぱり気づかない。

週に3〜4日、ガイと共にセルゲイが経営している護身術道場に通っている。

性格は、原作より柔軟で悪ノリもする。そして、原作より強い。

学園内では帰宅部。理由は道場通いがある為。そしてキアと遊ぶ為。

兄的存在として、当然だな。

ヨシユア・アストレイ（16）

エレポニア帝国領ハーメル村出身の高等部2年生の、もう一人の主人公。中等部から編入。男子寮生。

ウィッグ一つで女性（しかも美人）に化けれるステキ顔の持ち主。

10年前、ハーメル村が帝国の開発計画の立ち退き指定区域になった為、姉とその恋人とともにリベル王国に移住。住む家を探していたところ、カシウス・ブライト（エステル父親）と出会い、そのまま厄介になることになった。

その後、カシウスとレーヴェ、カリンからの提案でクロスベルへの留学を決意した。

うん、僕もそろそろ姉さんやレーヴェ離れをしないとね。

学園内では、剣術部（剣道ではない）に所属。でも、バイトの方が忙しい苦学生。

エリイ・マクダエル（16）

クロスベル市住宅街に住む高等部2年生。市長の孫娘。美人でグラマラスなロイドの幼馴染。

ロイド大好き。中等部3年間はロイドと離れ離れだった為か、復学した後、ロイドへの想いにバーストが発動した模様。

原作よりもアプローチは積極的なのが、ロイドが気づかない。報われねえ

基本的には謙虚で温厚。でも、ロイドの恋愛関係の話になると人が変わる。

ええ、ロイドは誰にも渡さないわ。

学園内では、料理部に所属。セルゲイ道場にも（ロイドの付き添いで）通っている。

エステル・ブライト（16）

リベール王国出身の高等部2年生。中等部から編入。女子寮生。典型的な運動少女。でも、本人は運動よりも釣りが好き。そして単細胞^{バカ}。思い立ったら即行動。

父親はリベール王国において英雄とまで呼ばれているが、本人は別段気にはしていない模様。

だって、お父さんはお父さんで、あたしはあたしだし。あたしはヨシユアと一緒にいらればいいの。

学園内では、陸上部、フィッシング部、その他多数の部活をかけもち。さすがにバイタリティが半端ない。

ランディ・オルランド（17）

高等部3年生。親父が転勤族（対テロ特殊部隊）だし、俺の出身つてどこなんだろーな？

男子寮生。ノリが軽くて面倒見のいいお兄さん。美人でグラマーな年上の女性が好み。

ニヒルなイケメン。よく騒がれる。だがそれだけ。あの人、かつこいいよねー。で止まっちゃうタイプ。

最近の悩みは、何故かよく席が隣になるクラスメートの小言と、従兄妹のやんちゃっぷり。

学園内ではサバイバル部。セルゲイ道場にも通っている。

ワジ・ヘミスフィア（15）

レミフェリア公国出身の高等部1年生。七曜教会総本山幹部司祭の一人息子。旧市街のプールバー？トリニティ？に住み込み。アッバスと二人暮らし。中等部から編入。

家系が家系だけにものすごく厳格に育てられてきたが、聖痕が発現した後、両親の態度が一転して腫れ物を扱うような余所余所しい扱いに変わった為、何か色々馬鹿馬鹿しくなって10歳で勘当同然で家出。

フフ、あの時は我ながら幼かったねえ。

その中世的なイケメン面を利用し、歌や踊りで旅芸人紛いの事をしながら路銀を稼ぎ、クロスベルに移動。

現在の旧市街でトリニティのマスター、アッバス（元聖杯騎士団正騎士）に出会い、意気投合する形で住み込みのバイトをするようになった。

学園内では帰宅部。ホストやったり、不良集団の頭やったり、ロイドに付いてセルゲイ道場に顔を出したりと、充実した生活を送っている。

リーシャ・マオ（15）

カルバード共和国出身の高等部1年生。極道幹部の一人娘。女子寮生。中等部2年より編入。

その出自のせいで周囲から敬遠されてしまい、ずっと友達がいらない孤独生活を送っていた。

生まれてすぐに母親がなくなっており、自分の父親以外との交流が殆どなかったせいで、殆ど感情のない人形のような少女になっている。

った。

だが、そんな彼女に初めての友達が出来た。もちろんあの攻略王です。自重しろっ

それからとある出来事があり、足を洗った父親共々クロスベルに転居。市立学園に編入。

周囲のキャラの濃すぎる人間と接していくうちに、あっという間に多彩な表情を見せるようになった。

最近の悩みは、とある演劇部のOBの女性が、やたら自分に絡んで来ること。特に胸。

自分を変えるきっかけを与えてくれたロイドに対し、好意を通り越して愛情に近い思いを寄せている。

私、エリイさんには負けません。

学園内では、演劇部に所属。

オリビエ・レンハイム（17）

エレポニア帝国出身の高等部3年生。ホテル・ミレニアムに在住。なんとというか皇子。従者と二人で滞在。

本当は男子寮に入りたかったのだが、本当に色々あって断念。残念だよ、ヨシユア君。

やんごとなきお方なのだが、そして学園生全員が知っているのだが、誰も皇族扱いをしていない。そして彼自身もそれを望んでいない。彼が何故クロスベルに留学してるのか。その答えは誰も知らない。というか多分ない。

モットーはラブ&ピース。愛にすべてを。

学園内では、吹奏楽部に所属。腕は超一流なのだが、変な作詞をする為、評価はアレである。

アガット・クロスナー（17）

説明要る？説明要るんですか？・・・はい、そうですか。

リベール王国ラヴェン又村出身の高等部3年生。中等部から編入。
？重剣？の異名があるらしいです。

そのバカでつかい剣に「俺の妹は世界ーイイイイイイイイイッ
！」とか書いてないよな？

見た目通りに短気なんですけど、意外にも行動はどっちかという慎
重派・・・らしいんですが・・・

バツファロー（瀕死）>Sクラダイブ>何でもいいからHP全回
復>バツファロー（瀕死）>ダイブ>（ryってループやったこ
とありませんか？

多分アレがアガ男さんの使い方ですよ？どう見ても特攻野郎じゃ
・・・というか絶対Mだな、コイツ

ああ、すみません。このSSでの設定ですよ。

妹好きです。そして妹は死んでません。とてもとーも妹想いなお
兄ちゃんです。

本人は至って無愛想にしてるつもりですが、乱暴な言葉遣いとは裏
腹の優しい行動は、子供達は敏感に感じ取ってますので、特に初等
部の生徒達に人気があります。多分エステルとかロイド以上に。

自分が認めた相手にはかなり友好的になりますので、意外とメンバ
ーのまとめ役になるかも知れません。

このツンデレ野郎め。キアとかシズクに手だすなよー・・・。
学園内では、ヨシユアと同じく剣術部に所属。

キア・ノイエス(9)

出自は不明。初等部4年生。クロスベル市西通りベルハイムの203号室で、ノイエス夫妻、セシルと4人暮らし。

生まれてすぐに捨てられていたらしく、遊びから帰ってくる途中のロイドに見えられ、保護された。

事情を一通り聞いたマイルズは、そのいささか深過ぎる懐具合を存分に発揮(自分の家計の出費はおろか、バニングス兄弟にかかる出費も全てマイルズが負担していた)、さまざまな手続きをした上で、ノイエス家に引き取った。

生まれてすぐだった、というのが幸いした為か、妙な拒絶反応もなく、マイルズ・レイテ・セシル、そしてお隣のガイ・ロイド、さらにその幼馴染のエリイやマリABELなどの愛情をその身体いっぱいを受け、ノイエスの子供として育った。

将来の夢は「ん〜、ロイドのお嫁さんっ」はい、どうもありがとうございます。ごさいました。

初等部には部活動が存在しない為、ご近所のシズク、モモ、リュウ、アンリなど、沢山の友達と元気いっぱい遊んでいる。

く生徒手帳vol.1く（後書き）

とりあえず、セルゲイ道場（笑）についてはまた後日。

約一名、扱いが酷い方がいますが、私は大好きなんですよ？

FC、SC、3rdと全部スタメンで使っていました。

〈始動〉（前書き）

最初に注意事項

このSSは、英雄伝説V 天空の軌跡及び英雄伝説V 零の軌跡 & 碧の軌跡のたまかな設定使った二次創作、しかも学園モノです。世界観は作者の妄想がベースとなっておりますので、キャラ崩壊、原作との設定相違、ネタバレなど、不快になる恐れのある要素満載となっております。

原作を大事にされたい方は、閲覧しないことを強くお勧めします。

〜始動〜

その日は嵐だった。

いや、？嵐？と言つても、風は殆ど吹いていないし、空を見上げればこれでもか、と抜けるような青空である。

嵐となっているのは、そこを見れば見渡す限りの人、人、人。

嵐の発生源となっているのは、クロスベル市立学園の高等部校舎正面玄関のすぐ傍にある掲示板である。

では、その騒動の渦中にある人物たちの様子を見てみよう。

まずは高等部2年生の対象者。

ロイド・バニングス、エリイ・マクダエル、エステル・ブライト、ヨシユア・アストレイ。

「そ・・・そんな・・・どうして・・・」(ヨシユア)

「馬鹿な・・・何でだ？」(ロイド)

「ねえ・・・この二人、わざと言つてないわよね？」(エリイ)

「何言つてんのよ、エリイ。それだったらこんなに苦労してないわよ。あたしも、エリイも、他のみんなもね」(エステル)

次、高等部3年生の対象者。

ランディ・オランダ、オリビエ・レンハイム、アガット・クロスナー。

「ほー・・・。まあ、面白いモンが見れそうだし、やってやるとしようかね」(ランディ)

「はっはっはっ。愛しのヨシユア君と共に、この学園に愛を振りまこうじゃないか」(オリビエ)

「やるのは別に構いやしねえんだが……。他に書きようがなかったのかよ!!」(アガット)

最後に高等部1年生の対象者。

ワジ・ヘミスフィアとリーシャ・マオ。

「えええええええ!?.....私、立候補した覚えが全くないんですが.....」(リーシャ)

「僕、一応不良集団の頭テメなんだけど.....随分面白いことになってるみたいだね」(ワジ)

周囲の人垣が台風の如く形成されているその中心部。

ナイアル・バーンスが顧問を務める新聞部が作成した、クロスベル・スクールタイムズ特別速報。

第30回クロスベル市立学園高等部生徒会選挙結果発表

『はあ〜い さあ、みなさんお待ちかね。選挙の投票の集計が正式に終わったわ!』

情報ソースは当然ながら秘密だけれどね

それじゃ、行くわよ〜、今年の高等部生徒会のメンバーはこのコ達!

生徒会長 高等部2年D組 ロイド・バニングス

副会長 高等部2年A組 ヨシユア・アストレイ

副会長 高等部2年D組 エリイ・マクダエル

書記 高等部2年A組 エステル・ブライト

書記	高等部1年D組	リーシャ・マオ
会計	高等部3年A組	ランディ・オルランド
会計	高等部1年D組	ワジ・ヘミスフィア
広報	高等部3年B組	オリビエ・レンハイム
広報	高等部3年C組	アガット・クロスナー

以上、9人！いずれも極上のタレント揃いよ！

？天然ヒューマンブレイカー？ロイド君を筆頭に、？女装の達人？ヨシユア君、？伝説の英雄の娘？エステルちゃん、？万能お嬢様？エリイちゃん、？学園の舞姫？リーシャちゃん、？軟派な敏腕スナイパー？ランディ君、？背徳の聖職者？ワジ君、？変態吟遊詩人？オリビエ君に、？お察しく下さい？アガット君！

あっはははは！どう見てもイロイロ問題が起こりそう！生活指導のダドリー先生なんて胃薬飲んでたわよ！まあ、気持ちは分かるかも！労ってはあげないけどね！

ゴシップを期待するなという方がムリでしょ、コレ！今後の高等部生徒会の活動に大注目ね！

ああ、やっぱりわざと留年した甲斐があつたわ〜！

あ、この新聞を勝手にはがしたら、先生だろーと生徒だろーと容赦はしないわよ！

我等が新聞部の総力を挙げて、私生活を完全密着で暴露しちゃうから！

著・編集 グレイス・リン』

「僕・・・別に女装が趣味じゃないんだけど・・・」とは、ヨシユアの台詞。

「何で俺が……」とは、ロイドの台詞。

「グレイス先輩……この為に留年って……他にしたいことなかったのかしら」とは、エリイの台詞。

「まあ、面白そうだから別にいいけど……って、ちょっとヨシユア。いつまで凹んでんのよ」とは、エステルの台詞。

色々ツツコミ所満載の記事ではあるのだが。

そこに書いてある内容が意味することの方が衝撃的過ぎて。

結局、教師連中と風紀委員のメンバーが人払いを終えるまで、その嵐が収まることはなかった。

そして、その日から。

永く？伝説の？と詠われる生徒会が誕生した。

空の軌跡&零・碧の軌跡 二次創作学園モノSS

『とある学園の徒然草』 始動

「そうだったの・・・それでなのね」

初等部に通っているキーアから今日の出来事を触りだけ聞いたセシル・ノイエスは、そう言っただけで部屋の片隅で灰になって放心しているロイドを一瞥し苦笑した。

そして、ロイドアナライザー1stの腕前を披露する。

「LHRで面白半分にはウエンディちゃんに推薦されたけど怒って一旦取り消し。だけどいつまでも立候補者が出ずに焦ってきた学級委員長はノエルちゃんを見かねて、さらにマリアベルちゃんの絶妙な口車『大丈夫です、選挙活動を一切しなければいいのですわ』に乗せられ、『そうだな・・・兄貴と違って目立たない俺が選ばれるはずがないよな』と、自分のことを全く分かってないリアル充実系超絶鈍感朴念仁っぷりをここでも発揮して立候補し、その後の動向を放置した結果・・・・・・・・・・ロイドはあそこで灰になっている、と」

事の全てをエリイから聞いていたキーアは、その事実との誤差が全くない考察を滔々と語るセシルを羨望と尊敬の眼差しで見つめた。

「セシル、すごい！」

「ふふふ、だって、私はセシル？姉？だもん」

「わゝ。何かよく分からないけど、すごい説得力があるう！」

「ふふ、キーアちゃんもこういう台詞が似合う大人の女になるのよ？」

「うんっ、キーア頑張るっ！」

そんな仲睦まじい姉妹の後ろでは、

「ロイド、しっかりしろよ。兎に角、こうなったからには全力で生徒会の仕事にぶつかってみろ。そうすりゃ、そのうち色んなモノが見えてくる。手前だけの仕事のやり方を掴み取ってやるんだよ」

方向性の間違った励ましをしている熱血^{ガイ}兄貴と

「何でだ……」

それらの会話全て、右から左状態の灰人弟^{ロイド}の姿があった。

ピンポンパンポーン

現在、お昼休み。

それぞれが学食または持参の弁当を教室や屋上で食べている、学校生活において最も至福の時間である。

駅や空港、百貨店などでのアナウンスにも使われる、特徴のある音色を聞き、グレイス・リン（留年1年生）は顔を上げた。そして、音の発生源であるスピーカーを見る。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

しかし、その後沈黙を保っているスピーカー見て、首をかしげる。周囲を見回しても、ほとんど自分と同じようなリアクションだ。まあ、当然である。通常、沈黙を垂れ流す放送などあるわけがない。だが・・・

『副会長、ヨシユア・アストレイです。生徒会役員、各位に通達します』

ソレを聞いた瞬間、疑問は氷解した。そして

うおおおおおおおおおおおおおおおおおお

校舎を揺るがすほどの歓声。無理もない。あの冗談みたいな人員構成の生徒会が今まさにこの瞬間、活動を開始したという合図なのだから。用件は何も言っていないのにこの盛り上がり。もちろんグレイスもこの歓声に加わっている。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・』

深い、ふかーいたため息一つ。おそらく、今の歓声に対する反応だろう。

『今日の二六〇〇時、生徒会室に集合。あ、一応言っておくけど、

ロイド、リーシャ。逃げないようにね？もし逃げたら

」

びたり。

？もし逃げたら？の部分で、ロイドは持参の弁当（セシル、キーマ作）を食べている箸を止めた。唐揚げを啜えたままの状態だが、その先が気になって仕方がない。本音を言えば、逃げるつもりマンマンなのだが・・・

ちなみに、生徒会メンバーで参加に殊の他難色を示したのが、ロイド・リーシャ・ヨシユアの3人。

しかしヨシユアは、学費と下宿代レイヴェとカリンがの出資条件の圧力によって退路を塞がれており、問答無用で参加を余儀なくされている。

それはまあどうでもいいとして。

逃げた場合は何をされる・・・・・・？

『現在僕が把握してる限りの二人の秘密をボリウム最大で呟いてしまう可能性を僕は否定できないこともないがあるかも知れない』

ぶはっ、と唐揚げを噴出してしまった。てゆうか、ヨシユア。今の殆ど棒読みだし。むしろ、ヨシユアが知ってる俺の秘密って何だ。

（バキーン）歳までおねしょしてたことか。セシル姉と（ピー）歳まで一緒にお風呂入ってたことか。あれやこれや。ぐるぐるぐる。自分の記憶の世界に飛んでいったロイドを他所に、学園中は再び異様な盛り上がりを見せ、エリイは対面のロイドが噴出した唐揚げを見事に箸でキャッチ、そのまま「もったいないわね」と言っって口に運び3回ほど噛んで飲み込む。隣からそれを赤面し、羨望の眼差しでノエルが見つめ、その対面からマリアベルが人をも殺せそうな物凄い形相でロイドを睨みつけ、真下の教室で『ヨシユア先輩いっくす！』というリーシャの怨嗟の叫びが聞こえ、そしてグレイスを

始めとする新聞部は、どうやって秘密をバラされる二人の足止めをするかの方法をエニグマを通して相談するのだった。

そういうわけで。

とても平和にお昼休みが過ぎていくのであった。

「こんにちは、ロイド、リーシャ。遅かったね」

「グレイス先輩とナイアル先生に邪魔された」

「ヨシユア先輩・・・次やったら、私にも考えがありますよ？」

案の上、ロイドとリーシャが一番遅くなった。

まあ、当然である。新聞部と、ゴシップ好きの一般生徒が結託し、生徒会室に至るあらゆるルートに？人海戦術フアランクス？を展開。

突破に時間がかかってしまったのだ。

ちなみに現在一六時一五分。よく一五分の遅刻で済んだものだとロイドは思っている。

なお、この学園では、生徒会には担当の顧問が不在らしい。なんでも、現理事長のディーター・クロイツの方針で、自主性の尊重と自立心の向上が目的とかなんとか。

それはともかく。

「それで、今日の議題なのですが・・・」

そう言つて、ヨシユアは白のジャケットの胸ポケットからメモ紙を取り出す。

ちなみに、この学園、またしても現理事長の方針として、制服などはなく、服装自由となっている。

仮にも市立だろう。それでいいのか、クロスベル学園。

まあ、そんなことはとりあえず置いといて。

ヨシユアはその紙をみて、

「ぷっ。あははははははっ!」

一人で大爆笑。周囲は当然『何だコイツ』状態。しかもなかなか治まってないし。

あのメモ紙に何が書いてあるのだからか。

「何やってんのよ、ヨシユア。真面目にやりなさいよ。全く、何が書いて・・・あ・・・」

普段は滅多にお目にかかれないヨシユアの笑い顔を見たせいで、若干頬を染めてたエステルがメモ用紙をヨシユアから取り上げ、内容を確認。そして、

「あははははははははははははっ!」

同じように大爆笑なさいました。ホントにどうしたんだらう。

さすがに気になるので、エステルからメモ紙を受け取るうとして、

「ああ、ゴメン。説明するよ」

爆笑状態から復活したヨシユアにやんわりと妨害された。

そして、エステルからメモ紙を受け取り、居住まいを正した。

「どうやら、今日の議題についてと、さっきの爆笑の理由について説明するらしい。」

別に先に見せてもらっても問題ないと思うのだが・・・

「以前からの伝統なんだけど、この学園には部活存続制度というのがあって・・・」

それなら聞いたことがある。兄貴から聞いた話だ。

これまでの学園史の中で、部員がいなくなり廃部に追い込まれた部活が数件あるが、学園長が特に潰したくないと思っっている部については、生徒会のメンバーから人員を送り込み、1年間もしくは部員がある程度確保できるまで仮活動をするという制度だ。

もちろん、これは学園長独断で行うわけではなく、該当する部活の顧問からの同意の上、職員会議にて3/4以上の賛成があれば施行される。

個人的な見解を言わせてもらうなら、それはただの学園長の我が侷なのではないか、と思うのだが・・・。

だって、学園長からの依頼なら、その顧問だって、他の先生だって大っぴらには反対しづらいだろーし。

「・・・というわけで、前回の職員会議で『ある部活』がその制度施行の対象となったんだ」

もったいぶるなあ。この段階で、わざわざ『ある部活』なんて伏せ方するとは。

となると、それはさっきの大爆笑に関係あるのか？

見ただけで大笑いされる部活・・・うわー、そんなの仮でも入部な

んてしたくない。

「それで、その顧問の先生からの同意条件が、派遣する人物を指定させてもらうってことだったんだけど、昨日の生徒会メンバーの決定を受けて、今朝、その人物が決まったんだ」

それってつまり・・・？生徒会側の『その人物』については拒否権がない？ってことか？

なんというか、自治州にあるまじき基本的人権の無視。その人物もかわいそーに・・・

ん？さつきからヨシユアとエステルの視線がこっちにチラチラと・・・
チヨット待ッテ。まさか・・・まさかだよな？

「発表の時まで絶対に見るな、ってワイスマン先生に言われてたけど・・・ようやく理由が分かったよ」

そう言いながら、また顔面が引きつってます、ヨシユア君。やめてくれ。そしてこっち見ないでくれ。

「じゃあ、発表するよ」

「
バニングス」

派遣部門 手芸部 ロイド・

手芸部。しゅげいぶ。

えっと、それってもしかして、お母さんが夜なべしてるアレか？
麻とか毛糸とか使っちゃアレか？
ちよっと待

〜始動〜（後書き）

書いた後、投稿する前に思いました。

舞台設定が妄想準拠だから、話の内容とかキャラ設定がどう変わったるか全然わからなくね？と。

このままではアレなので、登場人物の簡単なプロフィールとか、舞台設定とかをまとめたものを次回投稿します。

あと、投稿形式としては、連載の形を取りますが、長編ではなく短編連作になるかと思えます。

〜講義〜

現在、五時限目の社会科の講義中。

五時限目って、私たち大半の学生にとって最大の敵との戦いが待っています。

え？何それって？

睡魔ですよ。

緊張感って、一度緩むと引き締めなおすのって大変なんです。

四時限目まで続いた緊張が、お昼休みで一旦緩んで・・・食事による満腹感がさらに睡眠欲求を後押しするんです。

私も少し眠たくなってきちゃったわ・・・

ああ、でも寝てしまっただめですね。

今は社会化の授業中。お祖父様のような政治家を目指す私にとっては、歴史は必修科目。

是即ち温故知新。古きを省み、新しきを知る、ですね。

さあ、エリイ。しっかりしなさい。

社会科の先生は、カノーネ・アマルティア先生。ちよっとキツめの容貌なのですが、美人な先生です。

非常に優秀だと他の先生方も仰っていますし、講義もとても分かりやすいので私もそう思います。

その容貌から、先生というよりはどこかの社長の秘書と言われた方

がしっくり来るような気がします。
そんな美人で優秀なカノーネ先生の講義なのですが・・・
その、一言で言ってしまうと、「分かりやすいけどつまんない」な
んです。

淡々と、淡々と進んでいく感じと、春のうららかな陽気がさらに眠
気を誘います。

ふふ、みんな眠気を振り払うように頭を振ってる。

「・・・・・・・・・・ぐー」

ついに力尽きちゃったみたいですね。

その寝息の発生源は私の右隣の席。

誰かは見なくても分かります。

私の一番好きな人

ロイド・バニングス。

教科書で隠すこともせずに堂々と寝てます。大丈夫かな・・・

「う・・・・・・・・ん」

あ、寝返り。顔がこちらに向きました。

無防備な顔が私の心をくすぐります。

今、この時において、私だけが見ることの出来る顔。

それは、ちよつとした幸運な偶然。

鏡がないから見えないけれど、きつと今、私は微笑を浮かべている
と思います。

オーバルカメラはさすがに講義中には使えません。

エニグマに撮影機能が付いてればよかつたのに・・・

さて、そろそろ起こした方がいいのかしら？

「フ、フフツツ……。バニングスウウウ……。…」

「ぐー」

・・・どうやら遅かつたみたいです。先生に気づかれちゃった・・・
ちなみにカノーネ先生、この世で一番嫌いなことが、「講義中に居
眠りされること」なんです。

後、怒ると怖いんです。何故か、って言うところ・・・「顔が變形する
から」なんですよ。

「いいわねえ・・・私の講義中に居眠りする、その度胸。その漢氣
に惚れちゃいそうだわあ……………」

「ぐー」

いえ、決して輪郭そのものが変化するわけじゃないんです。でも表情がどんどん邪悪に・・・あ、目の瞳孔がなくなってる、見事なヤンデレ化です。

ああ、教室の前の方に座ってる、気の弱い子なんかはもう気絶しちゃいました。

私でも、あんな表情^モが目の前にあつたら、意識を保っている自信がありません。

もう幽霊よりも怖いです。ガタガタブルブル

「必ず！殺す！」

先生、もう思いっきり振りかぶってます。

えっと、私も詳しくは知らないのだけれど。

チヨークって、手首のスナップで投げるものじゃなかった？

そして、第一球・・・じゃなくて、第一投、投げました

「ひゃあっ!？」 パアンッ

えっと、ありのままに起こった事をお話しますね？

先生の投げたチヨークが。

先生が一瞬前までいた頭部の位置の真後ろの黒板に当たって粉碎し

てました。

そして先生は教壇の下にひっくり返っていて（ちょっとスカートからシヨーツが見えています）

ロイドの右手が。

何かを投げたような状態で黒板に向かって伸びてました。

「ふぁ……おはようございます。カノーネ先生」

何事もなかったかのように挨拶。当然周囲は静寂に包まれたまま。

「な……何なのよ、あの弾速は！貴方、圓明流でも皆伝してきたの！？」

「それ、泰斗流のような東方武術の流派ですか？別に東方武術を修めている訳ではありませんが」

動揺から立ち直ったカノーネ先生……やっぱり立ち直ってないか。何か変な事言ってるし。

まあ、それはともかく。

会話から察すると、やっぱりあのチョーク、ロイドが投げ返したみたいですよ。

完全に眠っていたはずなのに……ロイド、あなた一体何者なの？

「全く、冗談じゃないわよ！当たってたら、下手したら死んでたわよ！？」

「死んでもいないし、当たってもいないからいいじゃないですか。」

それと、次はもう少し優しく起こしていただけると嬉しいです」

ぴたり。

あ、カノーネ先生の動きが止まった。

それにしてもロイド、先生の神経逆撫でしてるわね。謝らないし。それに今、？次？って言ったし。全く反省してないわね。

「いいでしょう・・・それは私わたくしに対する挑戦と受け取りました」

そう言つて、どこからか竹刀を取り出しました。

先生もかなりキてるみたいですね。何故丁寧語に。

それよりも先生、講義中に非殺傷とはいえ武器なんて持ち出しているのかしら。

「一つ質問させてください。ソレはどこから？」

「乙女の秘密よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・乙女？」

「！！！」

あ、先生キレちゃいました。

もう怒りすぎてて、人間の発音じゃなくなってます。ああ、耳が痛い・・・

ああ、そうしている場合でもないみたいです。

勇敢な男子生徒が数人、先生をロイドの所に行かせまいと体を張って止めています。

ちよっと、オスカー君。ドサクサに紛れて先生のドコ触ってるの。

とりあえず、先生を止めないと。でも正面は怖いから後ろから・・・

結局、その日はもう講義どころではなくなっていました。
もちろん、ロイドは放課後、職員室に呼び出されてしまいました。
もう、しょうがない人なんだから・・・

く講義く（後書き）

丁寧語は、場面の解説。

それ以外は、エリイの思考を表しています。

カノーネの年齢30歳前後という設定です。

く天誅く 上

「……………ロイド。あれは……………」

「ああ……………でも、こんなことって……………」

握った拳がブルブルと震えている。
なぜ、こんなことが起こってしまったのかと。

「……………夢じゃ、ないよな？」

「ああ……………夢であってくればよかったんだが……………」

やはり間違いはない。

ソレは、現実として二人の目の前に存在しているのだ。

「ランディ。俺……………」

「何も言つな、ロイド。俺だって思いは同じだ」

それは悲壮な決意。

決して譲れないものの為。

彼等はこちらに宣言する。

「………戦つぞ！」

例えどんなに困難でも。

この赦し難い理不尽な現実を変える為に。

「まずは仲間を。志を共にする仲間を集めよう」

「ああ……悔しいが、俺とお前の二人じゃ話にならねえ」

故にここは退く。

勝利の為に。

乗り越えなくてはならない『壁』を乗り越える為に。

「だけど……すぐに。そう、すぐにだ」

「ああ……絶対に。絶対に負けられねえ……」

そして、彼等は歩いていく。

頼もしき仲間が集う、クロスベル学園へ。

一度だけ振り返り、その双眸に『敵』の姿を焼付けた。

学園の教師、ソーニャ・ベルツの隣を歩くその男を。

「「待っている、セルゲイ・ロウ!!」」

「君達、馬鹿だろっ」

「まったく、そんなことで呼び出さないうでよ」

「はっはっはっ。愛し合う男女の邪魔をするというのは、いささか無粋じゃないのかい？」

「えっと・・・別にいいんじゃないありませんか？」

「くっくだらねえ・・・」

上から順に、ヨシユア、エステル、オリビエ、リーシャ、アガットの反応である。

生徒会会長直々の緊急召集ということで、それぞれが部活動を切り上げて集合したのだが。

用件を聞いた途端、落胆の声を上げる。

「君達は事の重大さが分かってないから、そんなことが言えるんだ」

「そうよ。セルゲイ館長よ！セルゲイ館長が、ソーニヤ先生と一緒に歩いてたのよ!？」

ロイドにエリイが追従。

ちなみに、ここまで他人を否定的に言うのは結構珍しい。

「一体どうしたっていうのよ、エリイまで。別にいいじゃない、ほっとけば」

「いや、確かにあまりよくはないかもしれないね」

「おや、ワジ君も否定的だね。君はこういう話は否定しないタイプかと思っただが」

「うーん。じゃあ聞きたいんだけど、何がよくないんだい？恋愛は

本人同士の気持ち次第だと思っけど」

至極真つ当な意見を出すヨシユア。
だが即座にランディが反論。

「いや、あのオッサンが相手じゃ、そんな一般論は通用しねえ！」

「絶対に許してはいけないんだ、そんなこと！」

基本的に、ランディもロイドも簡単なことでは怒りを表に出すタイプの人間ではない。

だが、その二人のただならぬ様子に、五人は驚く。

「えーつと・・・つまり、以前の私の父のような。堅気ではない方ですか？」

「・・・ヤクザとか、そーいうレベル以前のダメ人間！」

セルゲイ館長のダメ人間ぶりを如実に表す武勇伝。

門下生であるロイド、ランディ。そして出入りしているエリィ、ワジはよく知っている。

「みんな、ソーニヤ先生をよく思い出してくれ！あの人は美人で優しい、いい人だ！」

「まあ、そりゃそうなんだけど・・・」

「？ああ、めんどくせえ？なんて理由で脱税容疑で連行された人間にソーニヤ先生を任せられるか！！」

その事実にも、五人絶句。

さらにロイド達によってセルゲイ・ロウ武勇伝は語られていく。

「酔っ払って上半身裸で歓楽街歩いて職務質問されてた時は、酔った勢いで警官殴り飛ばしたし！」

「新聞読んで面白そうだからって理由で、道場休館して猟兵と戦う為に特殊部隊に入るし！」

たった一人で猟兵団一個中隊潰したらしいです。

そして、所属部隊の隊員全員倒して勝手に除隊したらしいです。

「そんな人だから、もう可能性云々の問題じゃなく、ソーニャ先生が不幸になるのが確定しているのよ！」

三名、ヒートアップ中。

残る六人も、反論の余地がないダメっぷりに肯定の意思を持って頷く。

「というわけだ。殺すぞ！」

「ロイド、キャラ変わってるよ……」

「なんでもいいから殺しましょう！」

「エリイまで……」

「後のことはどうにかするとして、殺すぞ！」

「ランディ君は、何となくハマってる感じだね」

とりあえず。
殺す方向で話が進んでいくらしい。

「悪いけど、僕はパスするよ。ちょっと今日は外せないバイトがあるんだ」

「あたしもパス。今日はフィッシング部の先約が入ってるから」

「すまないね。僕も今日は戦う気分ではないな」

「俺も無理だ。目え離すとすぐ練習サボるヤツらがいるからな」

ヨシユア、エステル、オリビエ、アガットは不参戦が決定。
アポなしだったので仕方がない。

ヨシユアの不参戦は特に痛いのだが。

「リーシャはどうする?」

「はい、お力になります。今日は基礎トレーニングだけですし、その遣い手にも興味がありますので」

「ワジは?」

「フフ、そうだね。僕もバイトがある日なんだけど・・・」

まあ今日は平日だし、エニグマで連絡を取れば休んでも問題ないだろう。

それよりも、ストッパー役のエリイも壊れ気味だし、本気で殺つてしまつと色々と不味い。

「ひとまず付いていくよ。参加するかどうかは決めないけど」

「よし。じゃあひとまず四人で勝負か。戦術はどうする?」

「闇討ちしかないかしらね。この人数でも、正攻法では絶対に勝てないわ」

「そんなに強いのですか・・・では、人通りの少ない場所に誘導する必要がありますね」

面識がないのに闇討ちにノリノリなリーシャ。どうやら昔の血が騒ぎ出したようだ。

「道場の看板を背負うのが相手だからな。・・・もう大体の配置は考えてある。見てくれ」

ランディが市街地図を広げる。

マーカーや矢印などが所々に記されている。

「道場は中央広場のここ。稽古は21時まで。その後は東通りか近くのレストランで晩飯を食う」

「で、その後には歓楽街で酒飲んだりカジノに行ったりしてから帰る」

「となると・・・裏通りのこの位置がポイントになりますね」

「ああ、それでここにロイド、距離を置いてお嬢、反対側にリーシャちゃん、そして俺がここだ」

「なるほど。奇襲、挟撃、伏兵、さらには狙撃ですか。本当に暗殺する為の陣形ですね」

よくもここまで・・・と感心するヨシユア。
余程恨みが溜まっているのだろうか。

「これでもまだ仕留められるかどうかは分からんけどな。お前はどっする？フジ」

「その辺で適当に見ておこうかな。気配は消しとくよ」

「了解。それでは・・・生徒会活動『セルゲイ・ロウ天誅計画』開始する！」

「おっ」「ええっ」「はいっ」

「終わった？じゃあ、お疲れさま〜」

「お疲れ様。僕はそろそろバイトに行かないと・・・」

「諸君の健闘を祈ろう」

「さーて、それじゃ、あいつらシメに戻るか」

今期の生徒会として、初の対外活動であるのだが、
やっぱりまとまっていなかった。

「これ、生徒会がする仕事じゃないよね」

……ワジ君正解。

〜天誅〜 上（後書き）

続きます

一応次は戦闘シーンです

〜天誅〜 下（前書き）

色々あって、セルゲイ館長を殺すことになった。

く天誅く 下

「生きてる」 その意味くをくさくがしっ続ける」

とても上機嫌なのだろう。

その男、セルゲイ・ロウはレストランの有線放送でかかっていた歌を口ずさみながら、帰途についていた。すげえ音痴だけどな。

て言うかオツサン。いい年した男が歌手でもないのに歌口ずさみながら歩いて外から見とどーなんだ。オイ、スキップするな。キモイから。

(ククク、なーにを企てるのかは知らんが・・・)

脱力、一息をつき、集中。

だらしない中年オヤジの顔から、一人の武術の達人の顔に変化する。

普通の人間には感じる事が出来ないであろう、その場の空気がセルゲイに警告している。

ここは、すでに戦場なのだ。

(上等上等。この俺に喧嘩売ろうなんてなあ)

「ククク、いい根性してるな、ロイド。ガイ譲りか？」

「く・・・やっぱり気づかれていたか」

建物の影からロイドが現れた。

その顔に特に表情は浮かんではいないが・・・少しの苛立ちが伺える。

機先を制する為の不意打ちが見事に看破されてしまった。

「いや、お前の気殺は見事なものだった。だが、連れの方がいただけないな。エニグマで隠れてるんだろうが、殺気が漏れてりゃ丸分かりだ」

そこまで言ってから振り返る。

そこにいたのは・・・ロイドとエリイだった。

ロイドと違い、エリイは隠密行動の技術はない。

故に、幻属性アーツ『ホロウスファイア』で姿を隠してたのだが、気配までは誤魔化せなかった。

なお、余談だが、学園内においてはアーツの使用は厳禁となっている。

「それで？全く事情が分からないんだが・・・」

「それを知る必要はない。必要なのは覚悟だけだ。セルゲイ館長」

「ククク、なるほどな」

理由を聞いてはみたが、ロイドは一蹴。

だが、セルゲイも聞き出せるなどとは思っていない。
このやり取りはただの通過儀礼だ。

「お前が絡んでくるとは思わなかったが・・・どういつ風の吹き回しだ？エリイ」

「ロイドが言いませんでしたか？館長がそれを知る必要はありません

ん

「フン。まあいいだろう。聞き出すのは張り倒してからでも遅くはない……来いよ、オラ」

「言われるまでも……ない（ありません）！」

それが開戦の合図。

それぞれが放つ殺気が渦となって吹き荒れる中。

ロイドが駆け出し、エリイはエニグマを駆動し詠唱を開始する。

「はぁあっ」

「ククク、いいな。久しぶりに本気が出せそうだ」

ロイドが放つ高速の連撃。

セルゲイはそれらの全てを見切り、避け、或いは軌道を逸らす。

避けるついでに置き土産とばかりにカウンターを放つ。

攻撃後の直後の一瞬の硬直を狙い、しかも完全に死角となっている位置からのボディブロー。

だが、ロイドもその危険を察知し、後ろに跳ぶことでダメージを抑える……のが目的ではなかった。

「七つから成る耀の御名の下、汝の存在を定義す。其は風。その軌跡、一条の疾光と成れ」

射線上からロイドが外れる。

間髪を置かず、発動。

「エアロシックル！」

「ごう、と。」

緑白色の閃光がセルゲイに向かう。

常人には不可能な芸当ではあるのだが、セルゲイはそれすらかわしてみせた。

さすがに体勢は崩れたが。

「隙あり。そこだっ」

「ねえよ。バカ」

その一瞬で背面からの攻撃。

その腕を掴み、投げ飛ばす。

「せいやっ」

「うおっ」

とつさに軸となっている右膝から力を抜く。

一瞬前までいた空間をリーシャの横薙ぎが通過。体重を左足に移動。

そのままの勢いで水面蹴りを放ち、蹴り飛ばす。

「・・・つとお」 ダアンッ

もちろん見えてなどいなかった。そんな気配もなかった。だが、本能としか言えない危険を感じ、回避行動を取る。一瞬遅れて跳弾の音。

「おいおい、なんなんだあ？」

「何度も言わせるな。知る必要はない、必要なのは……」

「「「覚悟お！」」」

二人が駆け、一人の声が夜の静寂に響く。

「せいっ」

「おおおっ」

「七つから成る耀の御名の下、汝の存在を定義す。其は焰。煉獄と成りて、咎人を断ずる奔流を示せ。マグナブレイズ！」

手加減など微塵もない、容赦のない攻撃と殺気の嵐だった。だが、それでいい。そうでなくては面白くない。セルゲイの顔が不敵に歪む。

「上等だ、ヒヨッコども。まとめてかかって来いや！」

1時間経過。

「ゼー、ゼー……。どうした、ヒヨッコども。まだこれからだろ
うが！」

「く、くそ。化け物め」

双方ともボロボロである。

だが、ロイド達は3人がかり。
セルゲイはたった1人なのだ。

「すまねえな、ロイド。しくじっちゃまった」

「ランディ……。いや、仕方ない。あの狙撃、避けられる方が異
常なんだ」

そう。異常だった。

攻撃後、敢えてロイド達には間合いを取ってもらい、一呼吸つく瞬間を狙ったのだ。

しかも、的の小さい頭部は狙わず、大きい胴体を狙って。

だが、その初弾は外れた。

そして、2発目を撃つ機会はやってこなかった。

おそらく、初弾をかわした時点で地形の状況から狙撃ポイントを割り出したのだろう。

セルゲイが間合いを外す時は、常にランディの位置からは狙えない位置となっていた。

当然だが、交戦中は狙撃などは行えない。

味方に当たる危険性を度外視すれば狙うこと自体は可能だが、さすがに味方を巻き添えにするほどランディは腐っていないかった。

ちなみに狙撃ポイントを変更することも不可能だった。

時間がかかりすぎるのだ。その間にロイド達が倒されてしまったのは元も子もない。

「そんな訳で・・・ここからは俺も仲間に入れてもらっぜ？」

近接戦闘では役に立たないライフルの代わりに、スタンハルバードを構える。

そして、呼吸を整え、ロイド、リーシャ、エリイも復帰。

さらにその攻撃は苛烈さを増す。

「そこっ、爆雷符！」

炸薬を込めた苦無を放つ。

軌道を見切り、最小限の動きで回避。

「アイスハンマー！」

頭上より、巨大な氷柱が出現し、落下。
左に跳んで回避。

「いくぞ、ランディ！」「合点承知だ！」

着地地点に二人が一瞬で距離を詰める。
連携戦技コンビクラフト『バーニングレイ
シ』

前方からは眉間、水月。背後からは延髄、そして移動の要となる膝裏。

人体の急所と呼ばれるそれらを狙った連撃。

セルゲイは、攻撃の上段と下段の僅かな隙間を、空中で身体を寝かせる体勢で回避。

そして、片手を地面に付け、それを支点として旋風脚を放ち、勢い余って体勢を崩した二人を蹴り飛ばす。

蹴った直後に、リーシャの切り下ろしを後ろに下がって回避、踏み込んで当身で吹き飛ばす。

その勢いで跳躍。一瞬の後、地面が隆起し、棘となって突き出した。

(さすがに少しばかり分が悪いか)

少しずつ、防戦に追い込まれている。手数が違いすぎるせいだ。

だが、セルゲイの口端は笑うように釣りあがっている。

ここで止める気などは毛頭ない。久しぶりの、文字通りの死闘だ。そんな勿体無いことなど、出来るはずがない。

「このまま数でたたみかけるぞ！倒れるまで、倒れるまでだ！」

「アイサー！」

「お任せを！」

「ええ！・・・七つからなる耀の御名の下、汝の存在を定義す。其は光」

セルゲイが構え、ロイド達が駆け出す・・・瞬間。

「そこまです！」

その声が周囲に響き渡り。

虚を突かれ、全員の動きが止まる。

そしてその声の方向を見やれば・・・渦中の人物、ソーニャ・ベルツの姿が。

「え・・・なんで先生がこんなところに？」

「僕が呼んだんだよ」

「ワジ君！？貴方何してるのよ」

エリィからの非難の声。

ソーニャの隣に立っていたワジは、心外そうに肩をすくめる。

「それは明らかに僕の台詞だと思うけど？何をしてるんだい、本当に」

「事情は知らんが、外野がうるせえよ。とにかく、今は楽しいんだ。邪魔するんじゃない！」

そう吐き捨てて、再び戦闘体勢に戻ろうとするセルゲイ。

だが・・・

「止めてください！先輩！」

「「「「・・・先輩？」「」「」

思わぬ関連性に呆ける4名。

だが、熱の上がっているセルゲイは、そんなことはお構いなしに

「うるせえうるせえうるせえ！ガキども、さつさとかかってこい！
4人がかりで1人を倒せずに情けなくねーのか！」

「何だと！？やってやるうじや

」

なおも続行の意思を見せる両者。

その様子を見て、すっと目を細めるソーニヤ。そして

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぶっ殺すぞコレ？」

「・・・はっ」

今、時間が止まってました。

(ロイド・・・拙いわ。ソーニヤ先生、閻魔モードに・・・)

ここでソーニヤ先生の閻魔モードを説明します。

先生は、学園ではダドリー先生と共に生活指導を担当してますが、本当に素行の悪い生徒に対して、この閻魔モードが発動するんです。普段が冷静かつ温厚なので、そのギャップがありすぎて怖くて誰も逆らえません。

このモードになったら、とりあえず土下座して謝るのが唯一の生存手段です。

以前に閻魔モードが発動した時は、当時有名だった不良集団の頭・・・ヴァルド、だったかしら。

その彼を恐怖で号泣させたことがあります。そして、今ではすごく真面目な人になってます。

「えっと・・・ソーニヤ先生？」

「黙れ」

「・・・はい」

ロイドもランディもすっかりビビってます。背筋をしっかりと伸ばして、イエス・ママ状態。

リーシャも全身がガタガタと震えています。私もだけど。

「昔の癖、変わってねーな」

「別に普段猫被ってるわけじゃねえよ。コレも地だ」

今の会話からすると、ある程度は親しい間柄だった、ということでしょうか。

「それで？まだ戦うつもりか？」

「当たり前だ！」

「おい、ロイド君よ。君はどうするつもりだ？」

「・・・」

「どうした、ロイド！まさかここで止めるなんて抜かすんじゃないだろうな!？」

右には獵兵殺し、左には閻魔。

当然ですが、ロイドの答えは決まっています。

ソーニヤ先生、お願いしますから、その目でこちらを見ないでください。

むしろ殺さないでください。

「止めます」

「いい子だね」

「この根性なしが！」

館長、すみません。私達も命は惜しいんです。

そんなわけで、生徒会活動『セルゲイ・ロウ天誅計画』は一応の決着がついた。

現在事情説明中。

ちなみに、セルゲイ館長については、「後で教えますから先に帰っててください。先輩がいると無駄にややこしくなりそうなので」ということで、ぶちぶち不満を漏らしながら帰っていった。

「……………とまあ、そういうことで」

「なるほど」

ロイド達4人は、自主的に地面に正座中。

主観の入らない客観的な説明が欲しい、との要望で、事情説明はワジが行っている。

「先輩はああいう人だし、私を心配してくれての行動なのは嬉しいけれど……ちょっとやりすぎだったよね、4人とも」

「……………すみませんでした……………」

きれいに揃った4人の土下座。

それを見て、ソーニャは満足そうに頷いた。

「後で先輩にも謝っておくこと。そうしてくれたら、私の方からは何も無いわ」

「はい」

顔をあわせた途端に再戦を要求されそうな気はするが。

ここで反抗する意味はないので、ロイドは素直に頷く。

「それで・・・結局、先生と館長はどういうご関係で？」

ある程度の予想がワジには出来ているが、何となく聞いてみる。
他の4人は興味津々といった様子。

「そうね、少々恥ずかしいのだけれど・・・若気の至りというのかしらね、私、昔は不良だったのよ」

「ああ、なるほど。つまりソーいうことが」

「ええ、それで合ってると思うわ」

「・・・つまり、どういことですか？」

あっさり納得しているワジと肯定するソーニヤ先生。
訳の分からないロイドは、続きを促す。

「昔、先輩の家の近所で喧嘩をやったら、先輩に『うるせえ！』ってその場にいた全員ボコボコにのされたのよ」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

ワジを除く4人、全員絶句。

ソーニヤは思い返すように目を細めた。

「あの時の先輩はすごかったわ・・・女の顔に顔面膝蹴りよ？あれは効いたわ・・・」

「何で頬を染めて言うのかは怖いので突っ込みませんが。それが縁ですか？」

「ええ、そうよ。悔しかったから、何度も再戦しに行つて。その度に返り討ちに遭つて腕とか足とかアバラとか折られて

」

「そこは省略してください。怖いですから。というか、やっぱり突っ込みます。頬を染めるな」

「嬉しかったのよ。話にならないくらいの実力差がある私に対しても本気で戦ってくれたことが」

その気持ちを理解することはおそろくないだろう。

ロイドはそう結論付けて、「そうですか」と相槌を打った。

「先輩っつーと？」

そう質問したのはランディだった。

たしか、セルゲイ館長はクロスベル学園出身ではないはずだが。

「後で聞いたなら、私の学校のOBだったようね。私もクロスベル学園OBではないわ」

「なるほど。じゃあ、昨日は何してたんすか？」

「食事代をたかられてたのよ」

「払ったんすか？」

「ええと……ええ」

「断らないと、際限なくたかってくるっすよ？あのオッサン」

「それは分かってるけど。頼られるのは嬉しくてね……」

不憫だなあ、この人。

それが、ソーニヤを除く全員の感想だった。

「じゃあ、その……先生と館長は、その……男女の関係ではないんですね？」

「ええ、違うわよ」

エリイの踏み込んだ質問に、はつきりと否定。

ロイド達は安堵の表情を浮かべた。

そして、夜が更けてしまったことに気づく。

「……ふう。帰るか」

「……だな」

「いたたた……痣にならないければいいのですが」

「あ、ロイド。もう遅いし、先生を送らないと」

エリイの提案にソーニヤが答えるよりも早く、

「連れてきたのは僕だし、僕が最後までエスコートさせてもらっよ」

「・・・そうか。じゃあお願いするよ。ワジ」

「OK、ロイド。それじゃ、行こうか。先生」

「ええ、お願いするわ」

ゆっくりとした足取りで、二人はその場を離れていく。
その後ろでは、

「では、私も帰りますね。ロイドさん、送っていただいてもよろしいですか？」

「ああ、構わないけど」

「あら、ロイド。こんな夜遅くに、私には一人で帰れと？」

「えっと・・・ランディ？」

「バーカ、ちゃんと二人ともお前が責任を持って送ってやれ。ま、どっちを先に送るかは知らんけどな。じゃー、またな」

「ちよっと、おい、ランディ！」

「では、ここから近いエリイさんの家から行きましょうか」

「あら、ロイドの家は私の家からの方が近いし、まずは学園寮から行きましょう」

「・・・などというとてもお約束な展開があったのだが、それはまーどうでもいい。」

「それで、先生」

「何かしら？」

「先生は、さっき男女の仲ではないって言ってたよね？」

「ええ、それが何か？」

「じゃあ、そういう仲になりたい、と思ったことは？」

「………いいえ、思っていないわ」

否定するまでの一瞬の間。

それが答えなのだろう。

「そう。難儀だね」

「貴方、人の話聞いてた？」

「まあ、頑張つてね、先生。面倒だから手伝いはしないけど、応援くらいならしてあげるよ」

「ちょっと、ワジ君？」

その後。

「私が？先輩を？そんなことあるわけがないじゃない……」

そこで、エニグマの着信音。

誰からだろう、と思いつつ、通信開始。

「はい、もしもし？こちら、ソーニャ・ベルツですが」

『ソーニャ〜。悪い、財布落とした〜。助けてくれ〜。金がねえ〜。腹減った〜。飯が食えねえ〜』

「少し前にも同じような事があったばかりでしょう??どつどつして何回も繰り返すんですか!」

『悪いとは思ってるんだけどよ・・・とりあえず頼む。東通りに来てくれ。次の給料日には返すからよ』

「はあ・・・。分かりました。すぐ行きますから、そこを動かないでくださいね?」

通信終了。

ため息を一つ。

でも、そこには。

本当に嬉しそうな表情が一つ。

「もう・・・私がないと先輩はホントにダメ人間なんだから・・・」

〜天誅〜 下（後書き）

戦闘シーンはやっぱり難しいですね。

そして、ソーニヤ先生。あんまりソーニヤっぽくないですね。

そしてセルゲイ館長。

超絶強化がかかったセルゲイにしてみたつもりですが、何かセルゲイって言うよりは、怠け癖の付いたガルシアさんになってしまいました。

く部活く

チクチク

チクチクチク

その日の放課後。

ロイドはその部屋にいた。

チクチク

チクチクチク

彼は不満だった。

何故自分はこの部屋にいなければいけないのかと。

チクチク

チクチクチク

だから彼は聞いた。

この部屋・・・手芸部部屋の主のその男に。

「あの。レクター先生」

「あん？何だよ」

「どうして俺は、ここで季節外れのセーターなんて編まなければいけないんでしょうか？」

「知るか。じゃあどうして俺は、こんなご立派な手芸部の部室で男がセーター編むのを観察しなきゃいけないんだよ」

全くもって不思議だった。

「それが嫌なら、手芸部の顧問なんて断ってしまえばよかったのに」

「バカ。あのオッサンに逆らえる訳ねエよ」

学園長を指してオッサン呼ばわりするレクターもなかなかのものである。

もちろん、ロイドもレクターの立場だったなら、本心はどうあれ断れはしなかっただろう。

アレを相手にして反抗できる人物を、ロイドは想像することができなかった。

君子は危うきには近寄らないのだ。

「でも、どうして、よりによって俺を指名したんですか？」

「ああ、それは今にわかる。上手くいきゃ、一月後には制度対象から除外されるかもしれねエゼ？」

ま、除外されたとしてもお前を逃がす気はねーけどな。
向こう一年間は利用させてもらっさ。ケケケ

「そう上手くいきますかね」

「まあ、せいぜい上手くいくように真面目に活動するんだなア」

「はいはい……ん？」

トントン

ガラッ

そこには、二人の女子生徒。

「あの……手芸部の部屋はこちらでよろしいでしょうか？」

その台詞に、ロイド驚愕。

その台詞に、レクター歓喜。

「馬鹿な……ありえない……」

「ビュッ」

「入部希望————！！？」

ロイドの魂の叫びだった。

「というわけで、度重なる偶然が悉く理不尽な結果を運んでくること
とがつまるところ不満なのであり」

「

「はいはい。要するに、入部希望者が来たおかげで仮入部活動を続けなくちゃいけなくなっただってことだね？」

「単純に、面白味なく簡潔に言つとそういうことだな」

次の日のお昼休み。

ロイドとヨシユアは、学生食堂にて昼食を摂っていた。

今日は、セシルが風邪で寝込んでいる為、弁当がなかったのだ。

「でも、よかつたじゃないか。この調子で人を集め続ければ、きっと発展的退部をすることが出来るさ」

「上手くいくといいけどな」

ちなみに、二人の正式な入部が決定した後、ロイドは部長代理として、鍵当番を命じられた。

これで、放課後に部室を開ける為、毎日手芸部に顔を出さなければならなくなった。

嫌がらせか。

嫌がらせなのか、レクター・アランドール。

「あ、こんにちは、ロイド君。ここ、いいかな？」

そこに、件の新入部員である二人の姿。

3年生のエオリア・フォリナー。

そして、ロイドの同級生のノエル・シーカーの妹、フラン・シーカーである。

「こんにちは。ロイド先輩」

「ああ、こんにちは、フラン。エオリア先輩」

微笑みながら挨拶。

はい、ゆでダコ二つ出来上がり。

そして、そこに招かれざる客の姿。

「あらあ？ロイド君じゃない。ハロ」

「何の用ですか？グレイス先輩」

挨拶を挨拶で返さず質問で返す辺り、ロイドの警戒心は疑心暗鬼のレベルだった。

「もう、失礼ねえ。お姉さんが何をしたっていうのよ？」

「ご自分の胸に手を当てて考えてください」

「酷いわあ。今日は普通に昼食の相席をお願いしに來ただけよ？カメラもないでしょ？」

「・・・確かに。まあ、それくらいなら構いませんが」

他の3人も肯定の意で頷く。

そして、ロイドは渋々といった表情で、グレイスの為のスペースを空ける。

「それで、この組み合わせ。すごく珍しいと思うんだけど」
「ぴくり」と反応。

それだけで、ロイドはひどく落ち着かない状態となる。

「ええ。座るところを探したら、たまたまロイド君の所が空いたから。私たちも相席をお願いしたの」

「ふーん。まあ、ロイド君とヨシユア君はともかく。エオリアとフランチャン、かしら？二人が知り合いつていうのは意外ねえ」

そこで、ロイドがヨシユアに向かってよく分からないジエスチャーを開始。

よく分からないから、ロイドの意図が分からない。
分からないから、ヨシユアも疑問を発してしまう。

「そういえば、お二人の接点って思いつきませんか。どういった繋がりがあるんです？」

「えっと、私達。同じ部活の部員になったんです。ロイド先輩とも一緒なんですよ」

あ。

それで全てが繋がった。

ロイドのジエスチャーの意味も。

「へえ。ロイド君が部活に入ってるなんて、私の情報にもないわねえ。何部？」

絶望。

ロイドはすでに天を仰いでいる。

ヨシユアは話を強引に止めようと思ったが、すでにアフターフェスティバル。

「手芸部よ。ふふ、あの時のロイド君、かわいかったなあ」

ぶはっ。

グレイス・リン。ハンバーグを噴出。

ロイドの目からは一筋の涙が。

ロイドはあのジェスチャーで『その話題は今すぐ止める。グレイス先輩にそれを知らせるな』と言っていたのだ。

「ロツ・・・ロイド君がっ・・・・・・・・ロイド君が、手芸部ー
ー！？」

もちろん周囲には沢山の人がいた。

そして、大多数の人は、ロイドがどういう人間かも知っていた。顔こそ優顔だが、運動神経万能なこと。体の造りもしっかりしていること。

そんな筋肉質な男が・・・手芸部。

その日。

学園史上最大の爆笑と。

噴き出した食べ物や飲み物などで。

クロスベル学園学生食堂は地獄絵図と化した。

「そ、それじゃ・・・私、そろそろ教室戻るけど・・・ロイド君。ぶぶっ・・・ぶ、部活、頑張ってね」

「・・・いつか覚えていてください、グレイス先輩」

その声は、まさしく負け犬の遠吠え。

あのグレイスならば、有志を集めて見学ツアーくらいは組むかも知れない。

(ごめん・・・ロイド)

(いいさ・・・もう終わってしまったことだ・・・ハハハ・・・はあ)

ヨシユアとアイコンタクトのみでの会話。

それが出来るのがいいことか、よくないことかは微妙なところである。

そんな感じで、お昼休みは過ぎていくのだった。

チクチク
チクチクチク

放課後、手芸部部室。

ロイドは編みかけのセーターの続きを行い、エオリアとフランは手芸雑誌を開き、何を編むかを検討していた。ちなみに、ロイドは実は手先が器用である。キアの遊びに付き合っ、セシルに裁縫の仕方を何度も教えてもらっていたのだ。

無駄に上達しているのが実感出来る分、やるせなさも実感できるのが悲しいところではある。

ガラッ

「よう、やってるかね。手芸部の諸君」

顧問であるレクターが、コップと酒瓶を持ってやって来た。・・・
酒瓶？

「こんにちは、レクター先生。ちなみに先生も手芸部の一員です。
そして、部室に酒瓶を持ち込まないで下さい」

「何言つてんだよ。酒は人生の楽しみの一つだろ。何ならお酌し
てやるうか？」

「未成年に酒を勧めるのは、仮にも聖職者としてどうかと思います
が。というか、見つかったら懲戒モノじゃないですか」

「真面目だねえ・・・まあ、そこは色々抜け道があんだよ」

そして手酌。

コップになみなみと注ぎ、一気飲み。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つかあ~~~~~~~~。うめエ！」

「はぁ・・・全く。ああ、二人とも。気にしないでくれ。こういう
先生だから」

今のやり取りにポカーンと呆けていた二人に声をかける。
目の前で手をパタパタと振り、二人を正気に戻した。

「あはは・・・。よろしくお願ひしますね。レクター先生」

「面白い先生ね。私、お酌した方がいいのかな？」

「確実に調子に乗るので、絶対に止めてください」

エオリアに釘を刺し、編み物を続行。そこに

「ほう、どうやら新入部員が入ったようだな。少し邪魔するぞ」

そう言って、学園長

ギリアス・オズボーンが入って

きた。

無駄に大物オーラを醸し出しており、フランなどは圧倒されまくっている。

「よう、オッサン。久しぶりに一杯やってくか？」

学園長に向かって、学園内で酒盛りを提案する教師と。

「ふむ・・・いいだろう。コップは近くにもう一つあるのか？」

その提案をあつさり受け入れる学園長。

やっぱり何かがおかしいと感じずにはいられないロイドだった。

チクチク
チクチク・・・チク

「よし、完成だ」

セーターが完成し、ロイドは一息をつく。
素人目に見ても、そのセーターの縫製はなかなかのものであった。

「わわ、ロイド先輩すごいですね」

「本当ね。なんだか意外かも」

二人にもその出来を褒められ、照れたのか頭を掻くロイド。
褒めれるのはやはり嬉しいものなのだ。
ちなみに、大人二人は絶賛酔っ払い中である。

「そういえば、エオリア先輩とフランは、何を作るかもう決めましたか？」

「私はまだ決めてないですよ。エオリア先輩はどうですか？」

「そうね・・・。あ、ロイド君。一つ聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「あ、はい。何でしょうか？」

「そのセーター。誰かにあげる為に編んだの？」

その言葉にぴくり、とフランが反応。
そして、その反応を、酔っ払い二人が感知。

「いえ、特に何も考えず。練習ですし、サイズを測った訳でもありませんし」

「それなら、そのセーター、私に出来ないかな？今後の練習の参考にしようかと思って」

少し上目遣いでお願いするエオリア。

その様子を、やっぱり酔っ払い二人が感知。
ついでにフランも感知。

そしてこの男だけが気づかない。

「ええ、構いませんよ」

「ふふ、ありがとう。ロイド君」

華やかな笑顔でお礼をいうエオリア。

そして、物欲しそうにセーターを見やるフラン。

その様子を観察した酔っ払いレクターが、ついに行動を起こす。

「ふっふっふっ。いかななあ。いかななあ。フラン・シーカー」

「ひゃっ。な、何するんですかあ〜」

肩を抱かれ、部室の隅に移動。

その様子を、ロイドとエオリアはきよとんと。

もう一人の酔っ払いギリアスはニヤニヤと眺める。

「お前、ロイドの事が好きなんだろ？」（小声）

「えっ……。い、いきなり何を言い出すんですかあ〜！」（小声）
顔を真っ赤にしての抗議。

だが、その反応を『脈アリ』と踏んだレクターは構わず続ける。

「いいから聞け。そんな大好きなロイド先輩と同じ部活に入ったことは確かにアドバンテージとはなるが、ロイド先輩にとっては、今のお前はまだ『ノエル・シーカーの妹』でしかない」（小声）

「う、うう〜」（小声）

「だが、今、この瞬間こそ、そんな認識を改めさせるチャンスなのだ！」（小声）

「えっ……。そ、そうなんですかあ？」（小声）

食いついた。

ならば、後はもう引っぱり上げるだけだ。

「うむ。ヤツは鈍感だ。寄せられる好意には生半可なことでは気づかない。今はまだ付き合っている女もいないと聞く。お前はロイド先輩を『あなた』と呼びたくはないかね？」（小声）

「あ……。あなた……」（小声）

「だがしかし！このままでは、最悪の場合『お義兄さん』と呼ぶこととなる可能性もある！」（小声）

「ええ〜〜！それは嫌ですっ」（小声）

赤くなったり、青くなったり。

ああ、人をからかうのはやっぱりサイコーに楽しいなあ。

「ならば行け！そして言うんだ！『私もそのセーターが欲しい』と！」（小声）

「で……でも……」（小声）

「ほほう……。ロイドとノエル、なかなかいい組み合わせだ。これなら『お義兄さん』と呼ぶ日も「やりますっ」よっっ、その意気だ！」（小声）

深呼吸を一つ。

マインドセット終了。

「ロツ、ロイド先輩っ！」

「ど……どうしたんだ、フラン」

物凄い剣幕のフランに、押され気味のロイド。

体が心なしに仰け反っている。

「わ、私も！ロイド先輩が編んだセーターが欲しいですっ！」

（よっしやあ！）

レクターは心の中でガッツポーズをした。

これ以上ない最高の結果だった。

余裕がなかったのだろうか、論じた内容よりさらに踏み込んだ言葉になっている。

ロイド・バニングスには全く効果がないのだろうか、エオリア・フオリナーの牽制にはなるだろう。

「あ……ああ。エオリア先輩。そのセーター、サンプルとして部屋に置いてもいいですか？」

「ええ、もちろんよ」

にこやかな表情は変わらず。

でも先ほどより若干硬くなっていた。

(……大至急、エオリア・フオリナーとフラン・シーカーのパーソナルデータ収集を開始しろ)

(……了解。そんじゃ、エントリーの方は頼んだぜ、オッサン)

実はこの二人。

学園全体を巻き込んだトトカルチヨの胴元である。

そのトトカルチヨとは……ロイド・バニングスをゲットした女性を当てるというものである。

現在のところ、一位は同率でエリィ・マクダエルとリーシャ・マオである。

もっとも面白くする為、まだまだダークホースを集めなければならぬ。

(さアて、とことん楽しませてもらおうかねエ)

これから起こる大騒動を想像し、レクターはニヤリと笑った。

これからしばらく後。

学園史上最大の大騒動『クロスベル学園の大乱』ロイド・バニン
グス争奪戦』が勃発した……のかどうかは定かではない。

く部活く（後書き）

エオリアさんの姓は適当です。

学園モノ書くなら、やっぱり恋愛は入れないとなあ・・・と思ったので書いてみました。

そろそろ、ロイドだけじゃなくヨシユアメインの話も書きたいんですが・・・

ロイドの設定がいじり易いせいで、なかなか話が浮かんでこないです。

〜祭典〜 上（前書き）

これは、ロイド達の生徒会が発足するおよそ半年前。
ロイド達が高等部1年生の時のお話です。

く祭典く 上

正直、意外な申し出ではあった。
何故俺に?と思った。

だが、その男
ヨシユアの珍しい頼みごとだった。俺は
すぐに了承した。

そして、その判断は正解だった。

「あははっ、あはははははははははっ！」

知り合ってから半年程しか経っていなかったせいもあるが、ヨシユアがこんなに笑うところを見るのは初めてだった。

微笑み程度ならよく浮かべているが、ここまで笑うところを見るのはもしかしたら俺が初めてかもしれない。

俺の勝手な判断だが、これは親友と呼べる関係になれたのかも知れない。

「くくっ、あはははははははははっ！」

そして、俺も笑った。

さっきのあれは楽しかったし。
今は物凄く嬉しいから。

「あはははははははっ!」「あはははははははっ!」

お互いの顔を見て、競うように笑った。

屋上から空を見上げれば、気持ちよくなるような抜けるような青空。
その空を見上げて、俺は思った。

(・・・・・・・・よし、まだまだ時間はたっぷりとあるな)

さあ、親友。一緒に

「・・・・・・・・・・うーん・・・・・・・・・・」

クロスベル学園女子寮。

エステル、ジヨゼット、アネラス、ジル、ティータ、レン、ティオ。
7名の女子寮生がエステルの部屋に集まり、会議をしていた。

「アネラスさん。部活で最近ヨシユアが変だつてアガットに聞いたけど、具体的に何が変なの？」

エステルが、剣術部に所属しているアネラスに聞く。
まさに、議題はそれ。

部活内において、ヨシユアがここ最近様子が変だとのこと。

「そうだね。妙に機嫌がいいっていうか、嬉しそうっていうか、楽しそうっていうか・・・」

「ふん。いいことじゃない」

何かまずいことでもあるの？と疑問に思うエステル。

そう思い、周囲のメンバーの顔を見渡す。

その視線を受けて、ティータがぽつりと漏らす。

「うん。ひよつとして、ヨシユアお兄ちゃん、恋人でもできたとか？」

「「なつ・・・！！？」」

その言葉にエステルとジョゼットが動揺。

「アネラス先輩。それについては何か聞きました？」

動揺する二人を他所にジルが聞くと、

「恋人についてはきっぱりと否定してたなあ。じゃあ何？って聞いても答えてくれなかったけど」

その言葉で落ち着きを取り戻す二人だった。

「エステル、あんたってヨシユアと同じクラスでしょ。あんたの方こそ何かないの？」

「あつたらこんな話振らないわよ。ジョゼット、あんたの方はどう

なのよ」

「うーん、キール兄も分からんって言うってたしなあ」

「ティータちゃんは何か聞いてない？」

「あうあう。私も何も聞いてないです。レンちゃんは？」

「レンも聞いてないわ。クスクス。全く、ヨシユアったら何を考え
ているのかしら？」

「……………」

「あれ、そういえばティオちゃんがさっきから黙ったままだね。何
か心当たりがある？」

アネラスのその言葉に、ティオに視線が集中する。

「…………ええ。おそらく、ですが」

エステルとジヨゼットがずい、と身を乗り出す。

その分後退するティオ。若干引き気味らしい。

「キーアと一緒に遊んでいたロイドさんに聞いてみたんです。する
と…………」

「……………すると？」

「実は自分がそれに絡んでいるから今は言えないって仰ってました」

「ロイド君が？」

「明日には分かるから、大人しく待っている、と」

「明日って言うところ、文化祭よね」

そう、明日はクロスベル学園文化祭がある。

その準備の為、泊り込みで準備している生徒も少なくはないはずだ。中等部、高等部、大学の3つ合同で行われる（初等部のみ別日程で学芸会）文化祭は、全日程が4日間に及び、ノリがお祭りそのものである。

それ故、エレポニア帝国やカルバード共和国などからも住民が多く遊びに来る。

そして、そのスローガンは、『過労死上等』とか『政権公約、4日間貫徹』とか『無礼講』とか『規則？何それおいしいの？』とかそんなのばっかである。

「そういえば、ヨシユア君。最近、部活早退ばかりしてるなあ」

「うふふ、真面目なヨシユアにしては珍しいわね。それも関係がありそうだけど」

「………どうしますかあ？」

「ま、明日分かるって言うなら待ったときましょ。お楽しみは逃げやしないんだから」

エステルの言葉に全員が頷く。

そして、下の方で何やら悲鳴のようなものが聞こえた。

どうやら、ソーニャ先生が見回りを開始したらしい。

大方閻魔モードが発動してるのだろう。

「それじゃ、解散しましょ。あんな状態で文化祭を迎えたくないし」
その言葉で全員が自室に帰っていった。

(・・・さてさて。何がありますことやら)

大きな期待を胸に、エステルは眠りに就くのだった。

「ただいま」

「お帰りなさい、ロイド」

「ロイド、おかえり〜!」

帰宅したロイドを、笑顔でセシルが、タツクルでキーアが出迎える。

バランスを崩さず、しかしキアに痛みを与えないよう衝撃を吸収しながらタツクルを受け止めた。

「今日は兄貴はいないんだね？」

「急に泊り込みの仕事が入ったみたいよ。『くっそう、何で今日に限って泊り込みの仕事が入るんだよ〜〜〜〜！』って泣きながら出て行っちゃったわ」

「明日からの文化祭、ガイも楽しみにしてたのにね〜」

「はあ・・・全く、あのバカ兄貴は・・・」

額に手を押さえ、ため息をつくロイド。

だが、セシルもキアも、ロイドがちょっと嬉しいと思っていることを知っている。

「それで、ロイド。キアちゃんから聞いてるわよ。明日、何かするんでしょ？」

「うん。まあすぐに分かるから待っててよ。先に言っちゃうと面白くないしね」

「うん・・・そうね。私は待ってるわ・・・。いつまでも。そう、いつまでも・・・。」

両手を組み、膝をついて、潤んだ目で空（天井？）を見上げるように芝居がかった台詞を口にするセシル。
そしてそれを真似するキア。

「・・・何だかわからないけど、絶好調だね。セシル姉、キーマも」
「だって、明日がすごく楽しみなんだもん。ロイドが何をしようとしてるのか。ね、キーマちゃん」

「ね」

「・・・セシル姉、もしかして、明日仕事休む気？」

「もちろん」

「・・・まあ、怒ったマーサ師長の極・邪眼に耐えられるなら別にいいけど」

「はうっ」

聖ウルスラ医科大学病院豆知識

大学病院勤務のマーサ師長は、若い看護師達を厳しくまとめる大ベテランである。

とある若い看護師のドジが直らず、それを改善する為に編み出した技が極・邪眼である。

その視線は、ソーニヤ先生の閻魔モードに勝るとも劣らず、天を震わせ地を割り砕き地獄の鬼どもすら裸足で逃げ（略）

その光景を思い出したセシルは顔が青ざめたが、振り払うように頭を振って

「行くつたら行く、絶対に行くもん！だから、ちゃんと面白い物を見せてね、ロイド！」

覚悟を決めたように叫ぶセシル。

「それは任せてくれていいよ。じゃあ、俺はこれから夜の鍛錬があるから……」

キアアの頭を撫でてから、ロイドは再び出かけていった。しばらくふくれっ面をしていたセシルだが、冷静さを取り戻し、

「……マーサ師長に連絡しなきゃ……うっ、怖いよう」

「セシル、大丈夫？キアアからもお願いしてみるねっ」

「ありがとう。キアアちゃん」

キアアからの応援もあり、セシルはマーサ師長のお伺いを立てる為、通信機を取るのだった。

く祭典く 上(後書き)

続きます。

そろそろ生徒手帳書き足したほうがよさそうですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171y/>

とある学園の徒然草

2011年11月26日01時48分発行